

日本産業衛生学会東海地方会

# 地方会ニュース

発行所 日本産業衛生学会東海地方会  
〒470-11  
愛知県豊明市沓掛町田楽ヶ窪1-98  
藤田学園保健衛生大学医学部公衆衛生  
学教室内 電話(0562)93-2453  
発行責任者 島 正吾

(題字 皿井 進筆)



静岡県浜岡原発全景

## 老産業医の生き甲斐

中部電力健康管理室 出原 汎



最近とみに老後のことが気になり出した。ここ4、5年のことである。勿論高令化社会の到来のためかも知れない。あるいは自分が年をとったせいかも知れない。この老後も自分の老後ではない。私が30余年間面倒をみた社員達の定年後の生き様、死に様に興味をひかれ、目下執拗に追求している。これは自分のライフワークであった健康管理の成果の確認のためのような気がする。一方、自分とは云えば、元気で長生きするつもりでいる。傍らみれば相当草臥れて明日の命も知らないではないかと笑われそうだ。先ず自ら襟を正して、他人の世話をするのが本筋であろう。現在在職社員が定年迄健康で働いてもらうために、健康者管理に着手した。これがひいては老後健康へとつながるものと確信している。単なる健康づくり運動でなく、システム化して35才から定年まで続けることとした。当社のビルの一角に同友会という部屋がある。ここは定退者達の親睦および情報交換の場である。TV、囲碁、将棋等はおいてあるが、麻雀だけはどういいうわけかない。この会の仕事は毎年

名簿(生・死別)の作成、同窓会の開催、よろず相談(法律・健康・結婚)等である。毎日30名位の来訪者がある。私も週1回程度暇をみて覗くことにしているが、30分もいると、4~5人の定退者に会うことが出来る。近況や友人達の動向をさりげなくきくようにし、情報の収集に努めている。

今迄に調査した主なものは定年後の就労状況、定年々度別死亡率および死因、在職時の健康状態と老後との関係、当社役員の寿命等がある。3年ばかり前当社製のサバイバル健康法をつくるべく、多数の高令者に対してアンケート調査を実施したが、要領をえない回答が多く、整理に戸惑っている。今計画しているのは、職階別の寿命、昭和30年~40年の間に疾病管理の対象となった、結核、循環器、精神衛生管理者の、20~30年後の姿を追跡したいと考えている。このほとんどが退職しているの、早急にしないと、同僚達が刻々と消えていくので、死亡以外の情報が難しくなってくる。もう昭和26年度第1回卒は90才に達しているからである。せめてこれだけは完遂させないと、私も辞められず、勿論死ぬわけにはいかない。

## 第2回産業医、産業保健婦、産業看護婦 衛生管理担当者のための研修会

昨年につづいて、第2回の上記研修会が、下記の内容で、去る2月21日、名古屋ターミナルホテルにおいて、盛況裡に開催されました。参加者は129名で、昨年の110名を上まわり、主催者側として安堵の胸をなでおろしました。県別にみると、愛知58名、静岡32名、三重20名、岐阜9名、福井10名となり、職種別にみると、医師23名、保健婦36名、看護婦41名、衛生管理者・衛生担当者29名という内訳でした。また参加者のうち103名80%が非会員で、会員以外の人たちに対する学会活動という点では、まず成功したといつてよいようです。

今回は、配布資料を50ページに及ぶ図表集として、スライドに替える形で、かなり詳しくしてみました。

企画運営委員会で色々出た意見をまとめて、午前は特別講演、午後はシンポジウムという形式をとることとし、プログラムとしては次のような内容で開催することができました。

### 特別講演 「肝機能の評価方法とその保健指導」

ーとくに境界領域の取り扱いについてー

藤田学園保健衛生大学医学部内科教授 伊藤 圓

### シンポジウム 「活力ある職場のための健康づくり」

司 会 東芝(株)三重工場健康管理室長 橋本 哲明

#### 1. ヘルスチェック、運動処方について

愛知県総合保健センター循環器診断部室長 太田 寿城

#### 2. 運動生理学について

名古屋大学総合保健体育科学センター講師 島岡 清

#### 3. 栄養学について

名古屋女子大学家政学部教授 熊沢 昭子

今後、事業部の行事として、毎年1回、2月頃に定期的に開催していく予定でありますので、その企画運営等その他色々お気付きの点、ご意見、ご批判を是非事務局までお聞かせ下さいませようお願いたします。 岩 井 淳 (三菱名古屋病院)



「特別講演をきいて」

「快刀乱麻を断つ」 伊藤教授の特別講演を拝聴しての、これが私の総括的な印象。

巨大な化学工場、しかも再生力の強い沈黙の臓器といわれる肝。220億の細胞で構成され、個々の細胞がすべての機能を遂行しているその肝細胞にウイルスが住みつき、T細胞との戦で惹起される細胞の変性・壊死の結果、GOT・GPTやLDHは上昇するが、これらは肝細胞の機能障害を示すものではなく、むしろアルブミン・コリンエステラーゼ・血液凝固因子の低下および、ビリルビン・ICGの上昇に注目すべきであると強調された。日常の診療では逸脱酵素とくにGOT・GPTの増減に一喜一憂するな、と知識としては持っていますが、つい数値にとらわれがちである。あらためて「肝」に銘じておきたい。

社の生食で経口感染する全身症状は強いがやがて終生免疫が完成して治癒するA型肝炎、一過性感染と持続性感染と、個体の免疫機能の状態によって二通りの感染様式をとるB型肝炎。輸血後肝炎の99%以上を占め、しかもそのうちの60%が慢性肝炎となり、長年の間(約30年)に肝硬変を生じ、未だウイルスが発見されていない非A非B型肝炎について簡潔で明快な説明があった。



特に血液を介して感染が成立する後二者は、持続感染による無症候性キャリア(ASC)の管理が問題で、一度GOT・GPTが上昇したものは、それらが低下しても、管理からははずさないで、肝硬変ひいては癌化を念頭においてフォローしなければならないと。

B型肝炎については、日本人の2~3%がHB抗原陽性のASC(東南アジアやアフリカでは10~20%、欧米諸国では0.1%以下)で、男女比では男性は女性の2~3倍と高く、免疫力は女性より高いので、HB抗原からHB抗体へのSeroconversionは女兒の方が男児よりも早い時期におけるといふ。最近ではASCの発生は殆んど垂直感染によるそうであるから、これは人類にとっては幸せなことにはちがいないが、女性のしたたかさには、あらためて敬服せざるを得ない。

大変エネルギーな講演で、時のたつのも忘れて傾聴した。

多数の症例も用意されていたが、時間切れで簡単な説明で終られたこと、同時に質疑応答の時間もとれなかったのは惜しかった。

ともあれ、一応の知識は医学雑誌等で得てはいたが、教授の明快な解説で系統的な、病態生理学的な理解ができ、本講演で教えられ、再認識することの出来た知識を、今後の患者の保健指導に大いに活用し、無用の不安に追いこんだり、管理の手抜きをしたりしないよう、心がけたいと念じている次第である。

光永 一郎(東洋紡三重工場)

### 「活力ある職場のための健康づくり」を聞いて

私の職場でも、58年より、単に体重減少を目的とするのではなく、健康的な生活習慣を身につけることを目的として、健康教室を開催しております。

その中で、三本柱として成人病の理解を深め、健康の自主管理をする。健康的な食習慣を、身につける。運動習慣を理解し、自分にあった運動を見つけ継続することを目標にしております。

参加者には、事前検査と事後検査を行います。生活実態調査や、喫食調査も行い、教室終了時には総合評価をします。

日常の保健指導でも、その人の健康観・日常生活行動・食習慣の細かい部分を聞き出し、その中で、改善出来ることはないだろうかと話合います。たとえば、通勤途中で、一駅手前で下車し、歩い

て帰ることなどを勧めておりますが、なかなかむつかしいようです。

全社内では、「ラック (LONG ATHLETIC CARD の略) 運動」と言って、階段を100段登って1点、その場かけあし150回で1点というように、点数化して、毎日運動を続けることを目標に、健康づくりに取り組んでいます。

先生方のお話を聞いて、運動をすることによって、どういった効果が出て来るのか、運動を始める前のメディカルチェックがいかに大切か、日常の栄養の取り方に問題があるなど、最新の知識を教えてください、ありがとうございました。資料はこれからの仕事の中で、役立てたいと思います。ただ時間が充分になかったことが少し残念に思いました。また、企画していただけたらと思います。

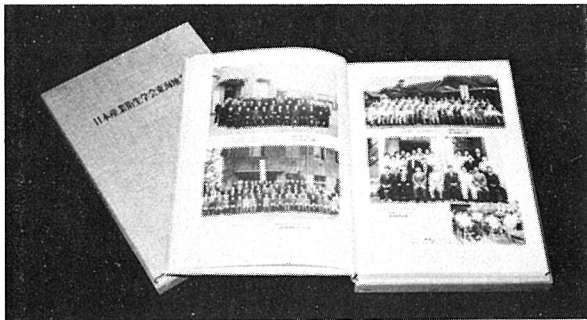
吉田 好枝 (東海銀行本店診療所)



### 随 想

#### ＜日本産業衛生学会東海地方会史 発行される＞

昭和57年7月以来、編纂委員会 (委員長: 井上俊) において編纂活動が続けられてきた「日本産業衛生学会東海地方会史」が、61年4月をもって発刊の運びとなった。井上先生が理事会の委託をうけて、資料の収集を始められたのが昭和54年、以来足かけ7年、練りに練って完成の日をみた労作である。



内容は、大きく鯉沼会長時代 (昭和11~31年) と皿井会長時代 (昭和31~59年) に分かれています。後者については、編集委員8名、その他14名が分担して執筆し、地方学会発表の変遷、各種協議会・研究会活動、日本産業医協議会の設立に至るいきさつ、などが生き生きと書かれています。前者については、井上先生にほぼ全面的に執筆いただいたわけで、史実を損なうことなく、さりとして単なる記録にとどまらない格調高い文面は、先生自身の公正な歴史観と長年に渡って培われてきた学究的な人柄に負うところが大きい。また常に資料集めの中心となっていた名大医学部衛生学教室、原稿を全文ワープロ (この新兵器の威力も大きかった) に入力いただいた大同病院の小森、鳥海先生の努力も忘れてはなるまい。

明るい装丁の195頁からなる本誌はすでに会員の皆さんの手に届いており、一読いただけたと思われる。会員外には、本部理事・評議員、賛助会員、医学系図書館等に謹呈され、その反響も大きく、送付してこれまでに、事務局、井上先生、島会長あてに送られてきた御礼の書簡は、200通近くにのぼっている。その内容は、当時の活動に実際に参加された方々の、懐旧の念がにつづられたもの、こうした書物を発刊できたことに対する東海地方会の歴史の重みと先生方のすばらしい驚嘆と地方会活動への敬意がしたためられたものが多い。この「東海地方会史」発刊が先鞭となって、全国の学会活動の活性化の一翼を荷うことができれば、会員一同望外の幸せとするものである。

加藤 保夫 (藤田学園保健衛生大学)

最近は何のせいか昔の思い出や思わぬ人との出会いは極めてなつかしい。私のように北朝鮮の片田舎に生れ、大学卒業まで朝鮮で暮らした者にとって尚一層強いものがある。近くは私の関連している一流企業の専務が同じ土地で生れ、大学でも後輩であることが偶然分った時、また某大学学長が私の恩師の御子息であり同じく大学の後輩であることが電話で判明し、活躍してられる現状をみて極めてなつかしい出会いの一つであった。

大学卒業後軍医となり陸軍々医学校衛生学教室で勉強中、現在の健康づくりに相当する健兵対策の一環として陸軍保育要領を作り、全軍に送った文中に中隊長は保有の責に任ずべしとか、常に親心をもって兵に接すべしと云った言葉が今でも脳裏に浮んでくる。企業の健康管理についても全く同じことが基本となるものと思う。衛生管理機構の中で部課長がその責を負う体制が出来て初めて効果的な健康づくり対策が可能である。

また戦争末期には冬期北満や樺太国境に研究出張したものであるが、現地住民 (満洲、白系露人、オロチョン族等) はその土地風土に適した衣食住であるが、同じ土地に住む日本人は隙間だらけの木造住宅に住み日本内地の生活様式をそのまま酷寒地にもちこんでいるのを見て驚いたものである。現在日常生活の指導を含めてすべての衛生管理には前記のような体制の下に強力な指導を発揮することが特に必要であろう。過去を思い出しつつ、そのようなことを考えたりしている昨今である。

井田 龍三 (岐阜簡易保険診療所)

### 会 員 の 表 彰

第3回

久保田 賞

井田 龍三 先生

(岐阜簡易保険診療所)

昭和60年度

緑十字賞

・ 服部 保次 先生

(富士電機鈴鹿工場)

・ 鷲野 昌夫 先生

(名古屋鉄道株)

## 学会研究会活動

### 第59回日本産業衛生学会

高校の修学旅行以来21年ぶりの広島行であった。学会の合間に原爆資料館に行ったが、中電の出原先生のほか何人もの先生に出会った。錫村先生が産業医学ジャーナルに連載された「似島」を読んでいたこともあり、暁部隊の活動を示す写真などを特別の思いで見た。その時、錫村先生は惨劇の現場にいたのだ。

さて、今回の学会では312題の一般演題の発表があったが、ここではVDTと有機溶剤の会場についてのみ触れる。最も多くの参加者の関心を集めたのはVDTの問題であった。300人は入る会場が満員の盛況であった。VDT関連演題は30題に上り、昨年の5割増しである。テレビ局、ゴム関連産業、商社、金融機関などのVDT作業者の自覚症、分娩経過、出生児の健康への影響、水晶体の微動調節への影響、経年的視機能変化、著しい目の疲れを訴えた症例、ソフトウェア技術者の生活パターン、心身の健康などに関する報告があった。またVDT作業に関する検討委員会の作成した「VDT作業に関する勧告」は、評議員会で妊婦への影響、時間規制問題などにつき若干の討議を経たのち、学会総会に報告された。

最も演題数が多かったテーマは有機溶剤で、60題の報告があった。溶剤の気道粘膜、中耳粘膜、睡眠リズム、脳内モノアミン、アミノ酸代謝、学習等への影響、末梢神経毒性、肝毒性など内容は多岐に涉っていた。興味をもった演題としては、スチレンの代謝物のスチレンオキシドとマンデル酸に末梢神経毒性があることを示した動物実験、スキーパンツ、下着などに伸縮性を持たせるために使われるスパンデックスの製造工程でジメチルアセトアミドに暴露された作業員の7人に発生した急性肝炎の報告などがあった。

今回の学会では、1題1頁で抄録が作られたため抄録集の重量は半減したが、その反面、一方では紙面一杯に細かい字で詰め込まれた原稿が増えて読みにくくなり、他方では記述が省略され口演を聞くまで内容が十分には分かりにくくなったという感想をもった。次回からは1～2頁の選択制にするとか壁発表を取り入れるなどの工夫も必要かと思われた。また、前回の名古屋における学会の時に総括討論の形式が取り入れられて参加者には好評だったと聞いているがその後そうした試みがないのは残念な気がする。学会の活性化について考えさせられた学会でもあった。

久永 直見 (名大衛生)

4月1日：15：50、広島に着く。初めてみた広島の街は新しい建物ばかりではなく、戦後40年の月日を感じさせた。18：00、職業性アレルギー研究会（厚生年金会館）へ出席。ホヤ喘息について、城智彦先生の話を聞く。夜は、瀬戸内料理に舌つづみをうつ。

4月2日：一般演題発表8会場（広島大学）のうち粉塵・じん肺関連会場へ行く。全部で30題の発表があり、ほぼ満席の会場では熱心な討議がくりひろげられた。石綿関連が10題（肺内分布、疫学、免疫）と最も多く、その他、X線や肺機能などの診断関連研究が減って、多様化してきた印象をうけた。17：00からは、じん肺研究会。5年間の肺機能経過観察をもとに、相沢好治、立川壮一両先生より、話題提供があり、自覚症やX線所見が評価に加味されるため、F（++）群の中に種々の病態が含まれるとの指摘があった。会場からは、自由集会ならではの“本音”の部分を含めた有意義な意見が続出し、時間不足の感があった翌日のシンポより興味深く感じた。

4月3日：シンポ「地域における産業保健活動の活性化のために」に参加。特に市町村レベルの産業保健連絡協議会（産業医、事業者、行政）の活性化、嘱託産業医に対する、レベルに合わせた段階的教育、作業現場での実践教育活動の重要性が強調された。

昼休みに原爆ドームと平和記念公園を訪ねる。“今の水爆は広島原爆の2500倍の破壊力をもつ”との説明が耳を通り過ぎた……。

加藤 保夫（藤田学園保健衛生大学）

### 第27回産業精神衛生研究会

第27回産業精神衛生研究会は、東海地方会職場精神衛生研究会の坂本弘、森川利彦の両先生を中心に企画され、地方会の全面的な支援の下に1月11日、名古屋中電ホールで開催された。



今回の企画が急激な技術革新や産業構造の変化の波にさらされている、職場作業員のかかえるメンタルヘルスの問題点とその対応策を討議すべく、各界の専門家に登場頂く公開シンポジウムの形式をとったため、関係者の関心が深く当地方は勿論、遠隔地からも産業医を始め保健医療関係者、衛生管理者、労務担当者、労働組合員など、さまざまな職種の方々の参加で320名にも達する盛大な研究会となった。



研究会は三菱電機の森川利彦先生の総合司会の下、午前は主題解説のため3題の講演がなされた。まずトヨタ自動車の伊藤英夫先生はストレス耐性の強化を、ついで東海銀行の飯田英男先生は節目に当る年代毎の精神心理的健康支援を、最後に三重県立看護短大の杉浦静子先生は看護概念の変遷と、自働力への援助者としての受容的態度の必要性を強調された。午後は「いま職場のメンタルヘルスを考える」のテーマでシンポジウムが行われ、三重大学の坂本弘先生の司会の下に飯沼義雄、石垣辰男、内山道明、池田正雄、西原哲三、足立省三の各氏が講師として参加され、それぞれ経営者、労働組合、研究者、精神科医、産業医、ジャーナリストの立場からメンタルヘルスの問題に鋭いメスを入れると共に、明快な対応策を述べられた。また昼休みには三菱電機で製作された「管理監督者のためのメンタルヘルスガイド」のスライド上映があり大変参考になった。

以上の様な次第で、本研究会の会長である御厨潔先生も研究会始まって以来の立派な企画運営に感謝すると挨拶されたが、大変充実した内容で参加者の好評を博し、小生にも非常に勉強になった一日であった。

鈴木 良一（東芝名古屋）

### 第34回職場精神衛生研究会

3月14日（金）PM1：30より大同特殊鋼本社に於て、世話人の祖父江逸郎先生の司会により約50名の参加者のもと、盛大に上記研究会が行われた。この研究会は今迄、欠勤問題・家族問題・職場不適応・ストレス……等々の問題を中心に行ってきたが、今回から職

場精神衛生の現状実態把握の面から研究を進めようと症例中心にした。まず、榑東芝三重工場の中川祐子保健婦から昭和43年に発病したうつ病患者の昭和60年11月に自殺するまでの経過が話された。患者をどの程度まで把握し、さらに患者をとりまく妻を中心とした家族や職場の把握及び理解をしたうえで精神衛生管理のむづかしさ、保健チームがどこまで強く患者に言えるか、家族のどこまで入り込んで援助を求めるか、専門病院にどこまでアプローチできるかという問題が出、『うつ病』や『管理』のむづかしさを改めて勉強し、さらに職場の位置付け、職場としての機能についても考えさせられた。次にトヨタ自動車の伊藤英夫産業医より産業医の立場からみた事例を中心に話され、特に長期休養から復職する際、無理に主治医に診断書を書いてもらったり、自分の判断で復職してくるといった者が多い。さらに薬だけに頼って病気のことを人のせいにしてたり、どうしたら治るかか自分の問いかけもなく、仕事や他人に責任転嫁する者が多いということで、各自の『アイデンティティ』が大きく左右するのではないかと。今後、産業の場のスタッフとして患者をどう把握し、何をし、どう管理するべきか等考えさせられ、活発な意見交換があり、盛況裡に研究会を終えた。

橋本 哲明 (東芝三重工場)

## 第 2 回作業負担研究会

第 2 回研究会は、寒さ厳しい 1 月 21 日、名大鶴友会館で盛大に開催された。第 1 回に引き続き、多数の参加がえられたことは、この研究会に対する関心の強さを示すものであろう。世話人の先生方の御努力に感謝したい。

最初に、「上肢、手の機能と障害」というテーマで名大分院整形外科中村夢吾先生のお話をうかがった。手の基本的機能としての握り、摘み等の意味と同時に総合的機能としての ADL の評価にいたるまで、極めて懇切丁寧にお教えいただき、久し振りに学生に返った気持ちで拝聴した。その他機能テストの機器の紹介、最後に生々しい手術例から手指機能の回復のし方を御教示いただき、いまさらながら親指と人差し指の大切さを身にしみて感じた。

次に「上肢負担に関する職場事例」として、トヨタ自動車の加藤隆康先生は、長年の科学的分析の成果である上肢負担の評価、特に物的対策からみた工具取扱い作業の評価法による改善事例と現状を報告した。又、日本電装の水谷進先生は、トヨタ方式に加えて、工具を使用しない作業(手作業)の評価法の確立とその展望を報告した。いずれも科学的根拠にもとづき数量化されているため、説得力のあるものであった。

最後に事務局より、第 1 回研究会のアンケートの集約が報告された。その中の検討すべきテーマは多岐にわたり、かつ現場にとって切実な問題であり、この研究会に寄せる会員の期待の大きさを感ぜさせた。

近藤 正人 (近藤医院)

## 第 5 回作業環境測定研修会

第 5 回作業環境測定研修会が昭和 61 年 3 月 7 日愛知県産業貿易会館で開催されました。今回の研修会は、「作業環境測定結果の活用と環境改善」をテーマに行なわれました。はじめに、日測協東海支部の教育活動委員の人達によって「環境改善事例集」が本日発刊され、その経過、目的等について若干の説明が、教育活動委員長よりありました。この事例集は、会員の皆様の協力により、各事業所で実際に行われた(安価で最も効果のあった)環境改善事例を一冊の本に収集したものであります。この事例集は、環境管理に携わっている人達の参考書として無くてはならない資料の一つになると思います。是非、一読を / 研修会は、環境改善事例集に記載されている作品の中で最も優れている作品が 3 題発表されました。どの作品も改善されるまでには、何度も何度も挑戦がなされ、さらに多くの人達の協力によって一つの改善がなされたのだという事がわかり、大変参考になりました。さらに、今回は、沼野労働安全衛生コンサルタント事務局長、沼野雄志先生をお招きし、「作業環境測定結果の活用と環境改善」と題しまして、先生が今までに手掛けられた環境改善についての講演がありました。先生は、環境改善を行うにあたっての手順ならびに取り組む姿勢についてのアドバイスを私達に教えて下さいました。今回の研修会も、私にとって有意義な研修会であったと思います。

長尾 文隆 (大同病院)

## 中部労働安全衛生コンサルタント協議会の自由集会

中部労働安全衛生コンサルタント協議会の自由集会が、61 年 1 月 31 日、毎日ビル 9 階の国際サロンで「労働安全衛生の歴史と体験を聞く」とのテーマで、小出喜一郎、長尾隆三、長谷部信一、皿井進の諸先生を囲んで、パネル討議方式で行なわれた。講師の方々はいずれも明治生まれで、労働安全衛生の歴史と体験を語って頂くには、まことにふさわしい方々ばかりである。

安全面については、小出、最年長(明治 35 年生)の長谷部の両先生にお話し頂いた。

衛生面からは長尾、皿井の両先生にお話し頂いたが、長尾先生は愛知労働基準協会に永年、籍をおかれた関係から、昭和 22 年の労働基準法にはじまり、次々に出された労働安全衛生関係の法の周知、スムーズな運用に、行政と協力して努力されたいきさつを話された。皿井先生は現在の日本産業衛生学会は昭和 4 年の産業衛生協議会の創立に始まっているが、この協議会の創立当時の役員は、すべて事業所の病院長とか、陸海軍工廠の軍医でしめられ、大学教授は入っていない、つまり臨床家を中心であったことを述べられ、更に自ら関係された二硫化炭素中毒の研究、化学繊維工業保健衛生調査会の設立の事情について話された。

四先生とも労働安全衛生に対する深い愛情をもって体験を語られ、かつ自らの体験を誇りをもって語られたことが印象的であった。

小森 義隆 (大同病院)

## 学会の活性化

日本産業衛生学会では学会の活性化のために学会賞を設けることが今年の総会で決定された。賞の選考規定によると「産業衛生学の分野における研究または実地活動において、価値ある業績をあげている会員を表彰することにより、産業衛生学の振興と奨励をはかることを目的とする。」とある。昨年来の議論でこの賞は学会の活性化をはかるための方策の 1 つであり、他の方策も平行して検討されるということで承認された。最近至る所で賞と活性化が流行しているが、活性化の中身が問題である。現在の国立大学のように講座当りの研究者や研究補助員の数を減らして、少ない人員で今まで以上に仕事をさせようというのも 1 つの活性化ではあろう。それでは産業衛生学会の活性化とは一体何であろうか。東海地方会でも活性化

の努力が行なわれ学会活動が活発になっていることは喜ばしいことである。産業衛生学会の活性化は単に会員のためのものではなく終局的には働く人たちの疾病の予防と健康の保持増進を一層推し進める研究活動を活発にすることであろう。例えば現在の日本では中小零細企業に働く労働者が過半数を占めており、これらの企業の多くには産業医もおらず、労働組合もなく、産業医学の恩恵を受けることは少ない。しかし、日本の労働衛生問題の多くがここに潜在していると思われる。日本全体の労働衛生水準を向上させる研究を推進する優れた研究者の輩出にこの賞が積極的な役割を果たすように運用されることを期待したい。

竹内 康浩 (名大衛生)

## 話 題

### 中小企業と環境管理

昭和56年労働省通達による「中小企業共同環境管理事業」略して「環管事業」は中小企業の環境改善のための目玉政策であった。平たくいえば環境測定費用の半分を、20万円を限度として助成するのだが、一つ条件があり、労働衛生コンサルタントによる作業環境診断を必要とする。私もこの事業の一部を担当し、年間9～10箇所、計47事業所を回った。その業種は、自動車シート、エンジン部品、アルミホイール、工作機械、織機、照明器具、コンデンサー、ダイヤモンド工具、刃物（茶刈機）、業務用洗濯機ドラム、真鍮バルブ、ゴルフのクラブ、サンダル、印刷と多岐にわたり、一べつしたのみで深い知識が得られるべくもないが、産業医の社会的勉強には大分役立った。しかし静岡県内の中小企業の主役は何といっても木工家具工業であって、対象47事業所のうち、31を占めている。初年度の対象は、大井川河畔に位置する「鏡台家具団地」と呼ばれる家具工場のグループであった。大分部の工場が50名以下、組合による共同管理体制の下にあるので、健康管理や環境管理上大きな欠陥はないといえる。性能の適否はともかく、各事業所共、塗装作業には局排ブースの設置等は常識で、少くとも前近代的な劣悪環境の印象はないようである。ただし組織化されない零細事業所ないしは家内工業では、もっと深刻な作業環境が潜在しているのではないだろうか。本事業の段階でそこまでは私共も把握することはできない。2年目以降、その他の業種を含めて実施し、本年度をもってこの制度は終了したが、5年間を通じ気がついた点を二つほど述べてみたい。

第一に、私が訪問した際、事業所のトップが会ってくれた所はほとんどなかった。衛生管理担当者が応待に当る所が多かったが、中には先方の立会者もなく、私達だけ直接職場に入って巡視し、後で報告書を書いて出ただけという例もある。所詮は環境測定の委託契約にすぎず、それ以上多くを望まない傾向のようだ。

第二に、「環管事業」が所期の目的に対し、充分成果を挙げたのかと問われれば、その評価には多少疑問が残る。前半の2、3年は事業所の選択もスムーズに行き、順調に活動できたが、後半になると希望する事業所が次第に少くなり、特に最終年度は候補事業所がなかなか無くて、吾々が労働省の事業に協力する意味で各事業所に交渉し、やっとやらせて貰ったという実情である。事業所側の受け止め方を分析すれば、従来環境管理に積極的な所は、費用の半分の補助は有難いことであるが、消極的であり測定を実施していない所は、残り半分の出費すら痛いということになる。

環境改善に対する投資に経済的な見返りはないが、金銭には代えられない価値があるという考え方が定着するには程遠く、いわゆる補助金行政の難しさを感じさせられた次第である。

斎藤 俊二（東海検診センター）

### ロケット打上げと安全衛生管理

去る2月12日16時55分、実用放送衛星BS-2b「ゆり2号b」が宇宙開発事業団（NASDA）の種子島宇宙センターから打上げられた。この衛星は5月下旬に赤道36,000km、東経110度の静止軌道に乗る予定で、現在、順調に飛行をつけている。

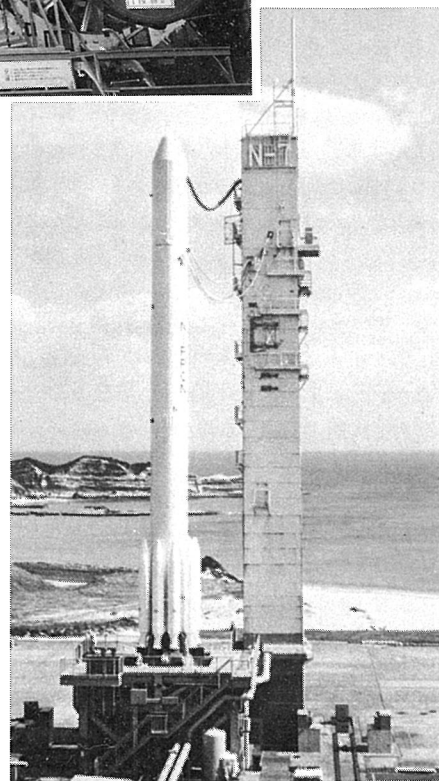
この約350kgの人工衛星を打上げるのに用いられたのがNII型ロケットである。N型ロケットは、昭和50年からI型が8個、昭和56年から一まわり大きいII型が8個打上げられる予定となっており、本年8月海洋観測衛星MOS-1を以てN型ロケットの打上げは終了する。以後は、550kgの衛星を打上げる能力を有するH型ロケットとなって、その第1号は年内に打上げられる予定で、現在宇宙センターでは、N-II型とH-I型の2つのロケットの発射整備作業

が平行してすすめられている。

打上げ作業は極めて緊張を伴うたいへんな作業で、先般のアメリカスペースシャトル「チャレンジャー号」の重大事故は関係者には強烈なショックを与えた。



NII型ロケット  
組立作業  
(三菱重工名古屋  
航空機製作所  
大江工場)



NII型ロケット  
打上げ発射場  
(種子島宇宙  
センター)

ロケット燃料の取扱いについては、詳細な安全衛生基準がNASDAにより定められており、作業者は徹底的に教育される。N型ロケットの燃料は、第1段の補助ロケットと第3段のロケットがポリブタジエン系の固体燃料で、これは火工品いわゆる火薬であり、その取扱いは危険物としてきわめて厳重に定められている。第1段の液体ロケットの推進薬は燃料がRJ-1というケロシンとガソリンの混合物で、これに強力な酸化剤として液体酸素LOXが、発射時に混合点火される。第2段の液体ロケットの燃料は、主推進薬がA-50で酸化剤は四酸化二窒素である。A-50はヒドラジン $N_2H_4$ と1-1ジメチルヒドラジンUDMH ( $CH_3$ ) $_2$   $NNH_2$ が略半々に混合されており、その燃焼により強力な推進力を発揮する。肝障害、溶血作用、皮膚粘膜の激しい刺激、とくに呼吸器障害を起こすとされる。四酸化二窒素 $NTO$ 、 $N_2O_2$ は窒素酸化物 $NOX$ の一つで、激しい呼吸器障害、眼障害を起こす。Nロケットでは、このA-50と $NTO$ による障害を重点に定期的な健康診断が行われた。

これに対して、H型ロケットは第2段の推進薬が液体水素、酸化剤が液体酸素となっており、現在世界で最も高性能の燃料とされる。スペースシャトルの燃料はこれであった。液酸水燃料は有害物というよりは危険物であって厳重な取扱基準が定められている。

ロケット取扱作業者は、今後A-50、 $NTO$ の暴露はなくなるものと思われるが、引きつづき長期にわたる追跡チェックが必要と考えられている。

岩井 淳（三菱名古屋病院）

## 会員の声

### 世の中の変わりとともに考える

青年老いやすく、学成り難しと言いますが、歳月の過ぎるは早いもので、検診関係の仕事に取りくんで16年の年月がたっしまいました。

その間世の中もずいぶん分変わり、物から心の時代へと流れが変わるとともに、人間の健康に関する価値観にも変化が表われ、体力の保持増強、心のゆとりを求める意識へと向いてきました。

今の若者に見られるように金や物でなく自分を一人の人間として時間にゆとりをもって人生を過したいと考えるようになって来ました。

書店には健康に関する本がところせましと並べられ、テレビ、ラジオでは健康に関する詳細な解説がなされている。このように知識過剰の時代に企業で働いている従業員の約80%の健康管理にたずさわっている私どもは、これからは受診者のニーズに沿った健診項目、体力測定を医学的立場から取り入れ、各個人の健康観を動機づけることが今後の課題だと考えています。

服部 啓一（岐阜県産業保健センター）

## 行政だより

### 昭和61年度の労働衛生行政について

職業性疾病は年々減少しているものの、疾病の内容を見ると、じん肺等の遅発性の疾病も少なくはなく、また酸素欠乏症や有機溶剤等による急性中毒も後を絶たない状況にあります。

また、新規化学物質の増加等新材料の職場への導入等に伴い、労働者の健康に係る潜在的危険有害性は拡大していく傾向にあるほか、OA化等の進展もあり、重点とすべき行政対象は生産労働者のみならず事務労働者へと拡がっています。このような現状に鑑み次の諸対策を進めることとしています。

#### 1. 特定疾病対策

(1) じん肺、有機溶剤中毒、特定化学物質による障害、鉛中毒、酸素欠乏症、振動による障害の予防を重点として、作業環境管理、健康管理、作業管理、労働衛生教育の推進を図る。

また、本年度より都道府県労働基準局長が指定した、その会員の中に有害業務を有する事業場を多数含む業種別組合のような中小企業の集団に対し、自主的安全衛生活動の促進を図ることを目的とした助成制度が創設されたので、これの円滑な遂行に努める。

(2) 昨年未達された「VDT作業のための労働衛生上の指針」の周知に努める。

#### 2. 中高年齢労働者の健康管理確保対策

昨年通達された「中高年齢労働者の健康づくり運動の推進要綱」（シルバーヘルスプラン）の普及に努める。

#### 3. 心の健康確保対策

心の健康確保の必要性が高まっていることから、企業内において健康相談等の実施体制の整備を図ることを目的とした、産業医、衛生管理者、人事労務担当者等を対象としたメンタルヘルスクエア研修が予定されており、この研修実施者である愛知県医師会と愛知労働基準協会と組織するメンタルヘルスクエア研修実行委員会と連携を保ち、この研修の円滑な実施に努める。

宮宅 英夫（愛知労働基準局労働衛生課長）

## Q & A

Q 現在、有機溶剤中毒予防規則で、作業環境測定が義務付けられている物質は、トルエン等17種類ですが、未規制のセロソルブ類等の物質も労働衛生管理上重要な物質です。これらの未規制物質に対する行政の動きについて伺いたい。

A 労働省は、昭和53年頃から中央労働災害防止協会に、第2種有機溶剤のうち測定が義務付けられていない30種類に対し※「測定技法の開発」として研究委託してきました。それを補強する意味で日本作業環境測定協会に委託研究が受けつがれました。この研究は、いわば測定義務化のための下準備であります。そして昭和61年3月、これらの物質の分析手法をまとめた「作業環境測定マニュアル」が日本作業環境測定協会から発刊されました。これらの未規制物質が測定対象義務物質として規制されるのは、3～4年後になるということです。

作業環境測定マニュアル 定価3500円 送料300円

発行 日本作業環境測定協会 TEL 03-456-5851

〒108 東京都港区三田3-7-18 長日本会館ビル

※ 30物質—エチレングリコールモノエチルエーテル、エチレングリコールモノエチルエーテルアセテート、エチレングリコールモノブチルエーテル、エチレングリコールモノメチルエーテル、1・4-ジオキサン、スチレン、メチルブチルケトン、メチルイソブチルケトン、メチルエチルケトン、ジクロロメタン、1・1・1-トリクロロエタン、シクロヘキサノール、シクロヘキサノン、メチルシクロヘキサノール、メチルシクロヘキサノン、エチルエーテル、テトラヒドロフラン、クレゾール、1-ブタノール、2-ブタノール、イソブチルアルコール、イソプロピルアルコール、イソペンチルアルコール、酢酸イソブチル、酢酸イソプロピル、酢酸イソペンチル、酢酸エチル、酢酸ブチル、酢酸プロピル、酢酸ペンチル (K)

## 理事会

第5回理事会 昭和61年1月14日(火) 大同特殊鋼本社 出席29名

- A. 報告事項 本部及び事務局からの連絡事項（島、立川）  
地方会関連研究会等の報告事項（立川）  
昭和60年度東海地方会学会について（竹内）  
日本産業衛生学会腰痛研究会について（竹内）  
日本産業衛生学会産業精神衛生研究会について（森川）  
地方会ニュース（第5号）発刊について（岩井）
- B. 協議事項 東海地方会史編集状況について（井上）  
地方会ニュース（第6号）発刊について（岩井）  
第2回産業医、産業保健婦、産業看護婦、衛生管理担当者のための研修会について（岩井）  
第2回作業負担研究会について（入谷）  
日本産業衛生学会「法制度検討委員会」報告に基づく討論  
“職業病の考え方について”（山田）

第6回理事会 昭和61年3月11日(火) 大同特殊鋼本社 出席19名

- A. 報告事項 本部及び事務局からの連絡事項（島）  
地方会関連研究会等の報告事項（加藤）  
第2回作業負担研究会について（入谷）  
第2回産業医、産業保健婦、産業看護婦、衛生管理担当者のための研修会について（岩井）
- B. 協議事項 昭和60年度事業報告・会計報告（案）、昭和61年度事業計画・予算案（案）について（加藤）  
昭和61年度東海地方会研修会について（岩井）

昭和61年度東海地方会学会について(竹内)  
 職場精神衛生研究会について(森川)  
 東海地方会史の発刊について(井上)  
 地方会ニュース(第6号)発刊について(岩井)

**会 員 の 消 息**

(60年11月30日~61年3月20日)

新入会員 26名

(愛 知) 富安誠志(岐阜県立多治見病院)、長谷川敬彦(中部労災病院・健診センター)、林 正人(当知診療所)、牧野宜一(川崎製鉄・知多・健康衛生管理室)、矢守貞昭(名古屋掖済会病院・内科)、菅原悦子(中部労災病院・健診センター)、佐野正純(千秋病院)、岸本広次(名古屋掖済会病院・内科)、近藤高明(名古屋大学・医・公衛)、井口弘和(豊田中央研究所)、棚橋昌子(愛知淑徳短期大学)、久野 皓(豊田中央研究所)、瀧日久仁子(名古屋大学・医・公衛)、佐藤幹夫(中部病院)、西川卓也(名古屋大学分院・整外)、堀 宗敏(名古屋大学分院)、恒川一勝(恒川内科医院)、渡辺泰子(名古屋大学分院)、蟹江純一(名古屋大学分院・整外)、今村貴和(名古屋大学分院・整外)、中村蓼吾(名古屋大学分院・整外)、石黒 憲(東邦瓦斯診療所)、安玉姫(名古屋大学・医・衛生)、黄 健(名古屋大学・医・衛生)、小澤尚彦(瀬戸健康管理センター)

(岐 阜) 日置敦巳(岐阜大学・医・寄生虫)

**これからの諸行事予定**

昭和61年度東海地方会研修会(日本産業衛生学会東海地方会総会)

期 日 昭和61年6月19日(木) 10:00~17:00  
 場 所 名鉄ニューグランドホテル及び新日鐵名古屋製鐵所  
 代 表 小森 義隆(大同病院)  
 特別講演 毛利 孝一先生

第32回東海公衆衛生学会

期 日 昭和61年6月29日(日) 午前9:40~午後5:00  
 会 場 浜松市民会館  
 会 長 桜井 信夫(浜松医科大学教授)

第20回日本循環器管理研究協議会(日循協)

期 日 昭和61年6月6日(金) 7日(土)  
 会 場 安田生命ホール(東京・新宿)  
 会 長 小町 喜男(筑波大学)

第26回産業健康管理研究会全国会議(全産研)

期 日 昭和61年7月5日(土)  
 会 場 健保会館(東京・青山)  
 世話人 上野 正巳(商工中金) 鈴木 誠一(労働医学研究会)

日本産業衛生学会 職業性アレルギー研究会特別企画

期 日: 昭和61年9月13日(土) 午後1:30~5:00  
 場 所: 国際サロン(名古屋駅前 毎日ビル8階)  
 「アレルギー疾患の診断・治療の進歩」

(1) アレルギー性接触皮膚炎の臨床  
 大阪大学教授 吉川邦彦

(2) 花粉症の診断と治療  
 日本医科大学教授 奥田 稔

(3) 間質性肺疾患の診断と治療  
 京都大学助教授 泉 孝英

(4) 気管支喘息と気道過敏性  
 東京大学教授 宮本昭正

世話人 島 正吾(藤田学園保健衛生大学)  
 協賛 日本産業衛生学会東海地方会  
 愛知県医師会

**編 集 後 記**

産業衛生の向上のために、医学・工学等の関係分野の総合的な取り組みが大切であるという認識は、年々高まってきている。しかし、具体的にどのように連携すればよいのか悩んでいた私だったが、先月号に掲載されたファインセラミックス産業のルポを取材して、そのわだかまりが一つふっきたような気がする。総合という意味を、別個で行われてきた成果をつぎ合わせると考えていたようで、共同して取り組むことによってこんなに成果があるとは考えてもみなかったからである。

柏木 時彦

次回発行 昭和61年9月1日予定

編集責任者 岩井 淳(三菱名古屋病院)

編集委員(五十音順)

柏木時彦(柏木労安衛コンサルタント事務所)

加藤保夫(藤田学園保健衛生大学)

小森義隆(大同病院)

竹内康浩(名古屋大学)

久永直見(名古屋大学)

森川利彦(三菱電機名古屋)

**切れ味あざやか**

経口用セフェム系抗菌薬  
  
**Kefral**® カプセル 細粒小児用  
 日本製セフェム系抗菌薬、セフェム系(第3世代)  
 Lilly イーライリリー社製薬 ①シオキ製薬

**消炎性抗潰瘍剤**

**マーズレン-S 顆粒**

発売元: **ゼリア新薬工業株式会社**  
 東京都中央区日本橋小舟町10-11

**フジサワ**

**多様化の時代に 東亜合成化学 応える**

東京都港区西新橋1-14-1 ☎03(502)2311(大代表)  
 支店/大阪 営業所/名古屋・富山・高松・福岡・広島・仙台  
 工場/名古屋・徳島・高岡・坂出